

保険毎日新聞連載「みちくさ保険物語」006

近代建築史と保険会社 (1)第一世代の建築家 辰野金吾

先日、某大学の図書館長と場末の居酒屋で飲んだ。最近、雑誌や資料のデジタル化が急速に進んだ。このこと自体は利用者にとって結構なことであるが、その一方で紙媒体を保存することに否定的な意見が大きくなっているという。この大学が、戦前の横浜正金銀行の史料を預かった時に、事務方からゴミを置かないでくださいとの暴論が吐かれたという。戦前の横浜正金銀行が近代経済史に果たした役割を考えると唾然とする。どうやら横浜銀行と間違えたようだが、これにしてもまったく失礼な話だ。

私の勤務する大学の古典資料センターには、スミス、ホップス、ミル、マルサス、マルクスなどの著作の初版本が数多く所蔵されている。10年ほど前に皇太子の修士論文の指導教員であるピーター・マサイアス先生をここにご案内したら、このような貴重本がどうしてここにあるのかと目をむいて問いかけられたことを思い出す。同窓生や同窓会の支援のお陰で収集されたことを説明した時の先生の表情は、この大学を本当の大学として認めてくれたようであり、誇らしかった。古いものをゴミだと思ふ人々があつまる大学は、その時代に流行している研究だけを推進することができたとしても、長きにわたり科学、教育そして文化を守り育てる大学となることはできないと思う。

保険の「営業案内」などの史料は、物質的には単なる紙切れに過ぎない。しかし誰かが収集しないと歴史から消えてしまう類の史料だ。歴史学は人類の自分史なのだから、私たちは消えゆくものに対してもっと優しい眼差しをもってよい。

とはいっても消えていかざる得ないものもある。その代表例は建築である。私たちは、よりよく生きるために経済活動をしている。近代市場社会は、その基盤として私的所有制度にもとづいた競争を基本原理としている。どんな由緒ある建築物であっても、経済的な理由により改築を免れえない場合があるのだ。

明治以来、西洋から伝播した近代建築もこの例にもれない。保険をはじめとする金融業は、近代建築の発注をとおして、日本の近代建築史に大きな影響を与えてきた。手元にある史料を利用して近代建築史における保険会社の建築物を取り上げたみたい。この連載では、すでに「保険給付の多様性」という一連のシリーズを書いているが、近代建築と保険会社をテーマに別のシリーズを不定期で書かせていただきたい。その第1回目として辰野金吾を取り上げる。なおこのシリーズを書くにあたって、数々の建築史の著作を紐解いたが、なかでも藤森信照『日本の近代建築』(上)(下)岩波新書、1993年、が大変参考になったことを、あらかじめ述べておきたい。

辰野金吾は、東京駅、日本銀行など、国家的に重要な建築を設計した、日本の近代建築の第一世代のリーダー格の建築家である。辰野は、民間の設計を数多く手掛けたが、その中で保険会社の建築物が占める重要性は小さくない。「童話的な塔を乗せる国籍不明のクラシック作品」(藤森『前掲書』(上) 222頁)とされる明治生命の坂本町の本社ビル(明治24年)は、明治生命の社史では明記されていないが、辰野金吾の初期の作品のようだ。掲

保険毎日新聞連載「みちくさ保険物語」006

載したのは、明治 27 年に発行された同社の「営業案内」の裏表紙に描かれたものである。なお明治生命の坂本町本社ビルはすぐに手狭になり、三菱 2 号館（明治 28 年）に移った。この建物には、一時期、東京海上や明治火災が同居していたが、辰野の先生であるジョサイア・コンドルが、辰野の兄弟弟子である曾禰達蔵と一緒に手掛けた作品である。

辰野が残した保険会社の建築物で有名なものは、東京火災の本社（明治 38 年）と日本生命九州支社（明治 42 年）である。東京火災は、関東大震災で崩壊した。掲載した画像は、新築記念絵葉書からトリミングしたものであるが、これからもわかるように美しい赤レンガの建物である。日本生命九州支社については、手元の画像の品位が悪いので掲載していないが、藤森氏によれば、東京火災同様、クイーン・アンと呼ばれる様式で建てられている。この様式は、ヴィクトリアン・ゴシックに続いて 1870 年以降およそ 20 年近く流行したものであり、ストリート性を重視したもので、ロンドンのアライアンス保険会社の本社（明治 16 年）がその代表作といわれている。辰野は、保険会社としての関連性に配慮し、ロンドン留学時の記憶からクイーン・アン様式を掘り起こし、2 つの保険会社の社屋の設計を行ったとも考えられる。ただし辰野は、クイーン・アン様式をそのまま導入したわけではなかった。辰野は、イギリスのそれと異なり、王冠のように塔やドームを設置した。日本生命九州支社では塔と小さいドーム、名古屋支店では掲載した画像でわかるように巨大なドームが印象的である。当時の人々は、これを「辰野式」と呼んだ。

官を辞した後の辰野は、かつての弟子をパートナーとして、辰野片岡事務所、辰野葛西事務所などで建築家の仕事をした。このうち建築家片岡安は、日本生命の社長片岡直温の女婿であり、昭和の初めまで日本生命の株主として名を連ねた人物である。日本生命の当時の支店の建物に「辰野式」が散見されるのは、辰野片岡事務所と日本生命の関係からであろう。すでに言及した日本生命名古屋支店（明治 43 年）は、同事務所による設計である。この建物は、「本格的な鉄の骨組み」を採用した点で、佐野利器が設計した日本橋の丸善書店の建物（明治 42 年）に次ぐ先駆的なものであった。（村松貞次郎『日本近代建築の歴史』日本放送協会出版協会、1977 年を参照）



画像 明治生命坂本町本社ビル



画像 東京火災本社ビル



画像 日本生命九州支店 画像が不明瞭のため掲載せず



画像 日本生命名古屋支店